

## 令和5年 経済建設委員会行政視察報告

### 〔参加委員〕

委員長 清水 秀三郎

副委員長 小林 英朗

委員 三石 義文、木内 義春、小林 松子、土屋 啓子、篠原 勤、市川 稔宣

1 視察日時 令和5年10月25日（水）～27日（金）

### 2 視察先及び視察事項

(1) 北海道函館市 「五稜郭公園の観光振興策について」

(2) 北海道登別市 「登別ブランドの推進事業について」

(3) 北海道室蘭市 「地方再生コンパクトシティ関連事業（東室蘭駅周辺地区都市再生整備計画事業）について」

### 3 視察概要

#### (1) 北海道函館市 「五稜郭公園の観光振興策について」

我が国に現存する西洋式稜堡城郭である「五稜郭」は、北海道函館市と我が佐久市にあり、佐久市の「五稜郭（龍岡城跡）」は長年、田口小学校の用地として使用されていたが、令和5年3月の田口小学校の閉校に伴って、史跡公園等への跡地の利用方法が検討されている。佐久市の「五稜郭（龍岡城跡）」の今後の観光振興策について、既に史跡公園として整備が進められている「函館五稜郭」の、市民に開かれた公園としての活用状況や、現在から今後に向けての観光振興策について、視察選定とした。

ア 日時 令和5年10月25日（水）午後1時30分～午後3時30分

イ 対応者 観光部観光企画課長、教育委員会生涯学習部文化財課課長

#### ウ 内容

函館五稜郭は1914年より公園として利用されており、史跡公園というよりも公園として、市民に親しまれている。周囲にはマラソンコースがあり、季節に応じて桜やツツジの花が咲き、藤棚が設けられていて、観光ボランティア「一會の会（いちえのかい）」や「愛」といった観光ボランティアの活動も活発である。

公園周辺で開催されるイベントとして、毎年5月に行われる「函館五稜郭祭」を筆頭に、「五稜郭の夢」として冬の公園の堀を約2000個の電球で彩り、美しい

星形をライトアップする試み、また、「函館野外劇」として五稜郭を借景にしたアイヌや北前船など歴史を感じられる市民参加の野外劇の開催が挙げられる。

また、公園周辺の利用状況について、戊辰戦争の舞台となり、フランスの蚕の市で偶然発見された一枚の写真を元に2010年に可能な限り復元された箱館奉行所を市営観覧施設として利用していることや、民間の施設である五稜郭タワー、市営駐車場の利用が挙げられる。市民の利用としては、4月中旬～5月上旬までエリアを定めて、公園内での火気の使用を可能とし五稜郭公園内でのバーベキューやジンギスカン、海鮮焼きなどを楽しむ函館市民の花見、が盛んに行われている。

## エ 考察

函館五稜郭と当市の龍岡五稜郭とは面積に違いはあるものの、今後、市民にどのように開かれた史跡公園として位置付けられていくかが重要である。そのため、文化財と観光財の両面からそれぞれの部署が連携を取りつつ、これからの活用方法を考えていく必要がある。

これまでの函館五稜郭が蓄積してきた様々な取り組みの、参考になる部分を十分に吟味し精査し、佐久市の合った形での文化財、観光財としての「五稜郭」の今後を、もちろん市民も参加した形で、検討していくことが考えられる。

冬場の観光客の集客については、函館五稜郭も課題としているため、より一層考慮する必要がある。



復元された函館奉行所と五稜郭タワーから五稜郭を望む

## (2) 北海道登別市 「登別ブランドの推進事業について」

農水産物、食品加工品の優れたものを推進協議会が認定してブランド化し、まちをあげて推奨品として、土産物やふるさと納税の返礼品として使われている、「登別ブランド推奨品」について、これからの「地域ブランド」による地域産業の発展と地域経済活性化の調査・研究のためにどのような課題や可能性が挙げられているか、また、いくのかを視察・研修として、「登別ブランドについて」を選定いたしました。

ア 日時 令和5年10月26日(木) 午後1時30分～午後3時00分

イ 対応者 観光経済部観光経済部商工労政グループ総括主幹、主査、担当員

ウ 内容

登別市は、「温泉のデパート」と呼ばれ、年間約400万人もの観光客が訪れる登別温泉があるものの、目玉となるような特産品が存在しなかった。

市内には美味しい商品を製造する業者は多くあったので、地元産業の活性化を図るため、平成21年より「登別ブランド」の確立に向けた取り組みを始め、「登別ブランド推進協議会」を設立した。

その後、特産品の具体的な対象や基準などを定め、産地基準、事業所基準地域性基準など6つの基準を定め、「登別ブランド」として認定し、令和5年9月時点で14事業34商品が推奨品として認定している。

主なものとして、ご当地グルメ「閻魔焼きそば」といったものがある。

登別ブランド推進協議会では、登別まるしえの開催やポスターやパンフレットなどに認定マークである「鬼のイチオシ、登別ブランド」を添付するほか、facebook、インスタグラム、インフルエンサーを用いた広報戦略の元、更にブランド推奨品のPRに勤め地域産業の発展と経済活性化に繋げようとしている。

エ 考察

現在、14事業34商品が認定されており、今年度新たに2商品が認定される予定である「登別ブランド」ではあるが、今後も開発や認定をどの程度まで増やしていくのか、現在ではブランドが広がることで地域産業の発展と地域経済の活性化に繋がるものとの見方があるが、新たな認定基準も必要なのではないかと考えられる。また、この「登別ブランド」と「登別温泉」の連携により一泊二日型の観光から、食も楽しんでもらう滞在型の観光に繋げていきたいとの期待が感じら

れるが、「閻魔焼きそば」の普及など、登別温泉との連携は更に必要と考えられる。



登別市役所での様子

### (3) 北海道室蘭市 「地方再生コンパクトシティ関連事業（東室蘭駅周辺地区都市再生整備計画事業）について」

中心拠点整備をきっかけとし、既存の商店街などとの連携により、エリア内の回遊性を向上させ、公衆人口の拡大につなげ、賑わいの再生を図り、国土交通省の地方再生コンパクトシティのモデル都市に認定された室蘭市であるが、まちづくりの主な取り組みとして、デマンド交通の実証実験や図書館、青少年科学館といった公共施設の更新、商店街の魅力向上等による地域活性化などの都市再生整備計画がどのように進められているか、これからの佐久市の参考になる部分があると考え、視察・研修として選定いたしました。

ア 日時 令和5年10月27日（金）午前9時30分～午前11時00分

イ 対応者 都市建設部都市政策推進課 課長補佐 係長 主幹

ウ 内容

特徴的な取り組みとして、図書館と環境科学館を集約、また市内のスポーツ施設を運動公園等を集約し、公共施設床面積の総量を抑制したことが挙げられる。また、エリア内の回遊性の向上に向けた取り組みとして、旧室蘭駅舎と隣接する公園を一体的に整備し、案内板を設置。商店街の活性化に向けた取り組みとして、まちづくりの担い手「発掘」、遊休不動産の活用、創業支援、まちづくりの仲

間づくりの場としてのトークイベント、企画段階から市民有志主体によるまちなかのオープンスペースを活用した、賑わいづくりの実証実験。これは9ヶ月で80を超えるイベントが行われた。

## エ 考察

室蘭市と佐久市では、佐久市の方が大きく、面積の上で異なる部分があるので、それをそのまま当てはめて考えることは難しいが、まちづくりの担い手「発掘」や市民有志による賑わいづくりのイベント、まちづくりの仲間づくりの場づくりなど、参考にすべきところが多く見受けられた。

また、公共施設の集約化など、今後、当市でも課題となってくる問題に関しても、エリア内の回遊性の向上など、参考にすべき点が多く見られた。



室蘭市役所での様子

